

「成蹊（石あかりロード）」

石は硬いものです。中でも庵治石は、世界で最も硬い花こう岩として知られています。でも、そこから漏れてくる光は、柔らかく、優しく心を和ませ、いやしを与えてくれます。

8月2日から開催されている「むれ源平石あかりロード2008」を見てきました。この「石あかりロード」は、今年で4回目を迎えますが、評判が内外に伝わり、年々、出展数も増え、さまざまな関連イベントも加わって、今や、高松の夏を代表するイベントの一つに数えられるまでの盛り上がりを見せています。会場は、ことでん八栗駅から、旧街道沿いに北へ、^{なすのよいち}那須与一が馬に乗って扇の的を射たという「^{こまだていわ}駒立岩」辺りまで、約1キロ。そこに今年は210の大小さまざまに個性あふれる石あかりが並べられて、来場者を迎えてくれています。

この沿道には、「駒立岩」のほか、与一がそこで祈りを捧げたという「祈り岩」、義経が誤って弓を海に落としてしまい、弱い弓が敵に渡り、貧弱さをからかわれることを恐れて慌てて拾い上げたという「弓流し跡」、平家が防衛のために構えた「総門跡」、そして街道のちょうど中間地点には、週末のイベント会場にもなっている弘法大師により創建された^{めいさつ}名刹「洲崎寺」があります。これらが主役の一つである源平合戦の史跡です。

もう一方の主役は、庵治石。石あかりで使われる石は、庵治石ばかりではありませんが、隣の庵治町とともに、日本一の集積と言われるこの地の石材業を支えているのは、何と云っても世界でここでしか取れない最も硬く、美しく、また高価な花こう岩である庵治石の存在です。最も硬く、磨くほど美しくなるからこそ、最も高度な加工技術が育ち、根付いているのです。世界的に活躍している^{ながれまさゆき}流政之さんが庵治の岬にスタジオを構えているのも、20世紀を代表する彫刻家であるイサム・ノグチが日本での滞在場所としてのアトリエを牟礼町に置いていたのも、この地に庵治石があり、高い技術を持った^{せきしやう}石匠、^{いしく}石工たちがいたからです。

「桃李不言，下自成蹊」（史記）＝桃やスモモは、美しくおいしいので、言わずとも自然に多くの人が集まってきて、下に^{こみち}小径ができる。

まさに今、琵琶法師が語った源平合戦の伝説を今に伝える史跡の上で、庵治石というオンリーワンの貴重な地域資源が石あかりという新たな展開を得て、人が集い、新たな蹊（ロード）が成らんとしていきます。